

お風呂

高知 五年 学

学校から一人で帰りながら、お母さんはなぜお風呂を最後に入るのか考えていた。それは、今日のつづり方の授業で、先生が、

「何か、不思議に思ったり、ぎもんに思ったりしたことを書いて。」

と言ったので考えた。ぼくは、たぶんお父さんが一番先に入って、お母さんが一番最後に入るのは、お父さんは働いているし、一家の大黒柱だから、お母さんは、食器を洗ったりする家の仕事が残っているからだと思いがら、早歩きで帰った。

ぼくが、ソファアースわってテレビを見ていると、

「ただいま。」

とお母さんが言っって、ソファアの所に来て、すわった。

「ああ、つかれた。」

と言っって、手で、かた、せなかなどをたたきながら、テレビを見ていた。

ぼくは、お母さんの前に立っって、ドキドキしながら、

「お母さん、なんでいっつも、一番最後にお風呂に入るが。」

と、聞くと、お母さんは、テーブルにひじをついて、天井を見て、こまっ
た顔をし、だまっっていた。ぼくは、じゅくのカバンをせおっって、

「ぼくが、じゅくに行っちゅう間に考えちよいてよ。」

とくつをはきながら大きな声で言っった。お母さんの返事は、聞こえなかつた。

じゅくから帰っって、玄関の戸を開けると、めずらしく、白っぼいパジャマを着たお母さんがローカに立っって、

「おかえり。」

と言っった。ぼくは、びっくりして、お母さんに、

「お風呂入っったが。」

と聞くと、

「学が変なことを言うので、先に一人で入っった。」

と言った。

ぼくは、お母さんに、

「お父さんが先にお風呂に入って、お母さんが一番最後に入るわけ、わかった。」

と聞くと、お母さんは、ゆっくり、

「昔は、男の人がえらいという考えが強かったがやろうね。でも、今は考えも変わって、時間の都合のつく人から入った方が何かとムダがないよね。」

と、ぼくの目を見つめて言った。ぼくは、

「ふうん。」

と言って、

「どうして、男の人がえらいが。」

と言うと、

「仕事しゆうき。いろいろなことをしてくれるき。」

と言った。お母さんの顔を見ると、この子どうしたがやろうみたいな顔をしていた。

ぼくは、二階にカバンを置きに行った。イスにすわって考えた。

ぼくのお父さんは、仕事の帰りの時間がいろいろなので、お母さんも用事がすんだら、このごろ先に入ることもある。ぼくも、その方が合理的だし、いろいろなムダをはぶけると思った。それから、みんなが集まる時間も長くなると思った。しかし、何回思い出しても、やっぱりお母さんが最後になって、十時ごろのお風呂が多いと思った。

一人でごはんを食べていると、お母さんは、だまって、ぼくを見ていた。ぼくは、何かいかんことしたろうか、言うたろうかと思いつながら、お茶をのんだ。何かいつものお母さんとちがうようだった。柱時計を見ると、九時半だった。



(指導 山崎義和)